「満ち足りた人生を生きる」　　詩篇 23:1～6

今日の説教題は「満ち足りた人生を生きる」です。人はなぜ信仰を求めるのでしょうか。一つには、自分に満たされないものを感じるからだと思います。人には、生きる意味や目的が必要です。人は動物ではありませんから自分自身の存在の意味や目的について悩み苦しみます。時には自分の弱さや罪深さについて悲しんだり、罪悪感を持ったりします。それが人格的に造られているということです。自分のこれからのことや死について悩んでいる犬はいません。この前、勝手に食べてしまった魚のことで自分を責めている猫は見たことがありません。人間が自分自身の存在や目的について悩むのは霊的存在として造られているからです。いつもそのようなことを悩んでいるわけではありません。しかし、そこに解決が無い限りずっと大きな宿題を背負ったまま生きることになります。「私が生きていることに意味があるのだろうか？」「私のしたことは神の前に本当に赦してもらえるのだろうか？」「死の先はどうなるのであろうか？」それらの問いに解決と答えを持って生きる人生は満ち足りた人生と言えます。例え病や様々な困難の中にあっても解決と答えを持っているなら感謝して生きることが出来るに違いありません。この満ち足りた人生を生きるにはどうすれば良いのかを有名な詩篇２３篇から学びたいと思います。

先ずこの詩篇を書いたダビデは最初に「主は私の羊飼い。私は乏しいことがありません。」と言い放ちます。「乏しいことがない」とは「満ち足りている」ということです。それは「足りない」ことでもなければ「有り余っている」ということでもありません。丁度、必要な時に必要なもので満たされるということです。では何によって人の心、内側が満たされるのでしょうか？　続けて「主は私を緑の牧場に伏させいこいのみぎわに伴われます。」とありますように羊には牧草が、そして水が確かに必要です。しかし、ダビデは牧草や水が羊を満たしているとは言っていません。「主は私を緑の牧場に伏させいこいのみぎわに伴われます。」と言って、牧草を与え、水を与えてくださるのは主であること、また私たちを満たしてくださるのは「羊飼いである主」なのだと言っているのです。4 節に「たとえ死の陰の谷を歩むとしても・・」5 節で「私の敵をよそに・・」とあるように、私たちの人生の日々は、いつも「緑の牧場」や「いこいの水のほとり」にいるようなものとは限りません。難しい問題に直面して途方にくれたり、不安に襲われたり、思わぬ苦しみに遇ったりすることもあります。この詩篇を歌ったダビデの生涯は、若い日にはサウル王に命をつけ狙われ、壮年期には外国の侵略に手を焼き、晩年になってからは息子からクーデターを起こされ、まさに「死の陰の谷」を歩き、「敵」に取り囲まれるような日々でした。しかし、ダビデは「私は、乏しいことがありません」と言いました。何故「乏しいことがありません」「満ち足りた人生を過ごしています」と言えたのかと言うならダビデは自分を取り囲むどんな状況の中にも、「主がともにおられる」こと認め、この主が私を守り、満たしてくださると信じていたからでした。

さきほど「何によって人の心、内側が満たされるのでしょうか？」と言いましたが「何によって」ではなく「誰によって」と言った方が良いでしょう。私の心をずっと満たしてくれるのはモノではありません。一時的にモノやお金は私の心を満たしてくれるでしょう。しかし、それは一時的です。「誰が、私たちの心を満たしてくれるのか」、それを知ることが最も大切なことです。使徒パウロは、「乏しいからこう言うのではありません。私は、どんな境遇にあっても満足することを学びました。私は、貧しくあることも知っており、富むことも知っています。満ち足りることにも飢えることにも、富むことにも乏しいことにも、ありとあらゆる境遇に対処する秘訣を心得ています。」ピリピ 4:11-12 と言いました。そして、「私を強くしてくださる方によって、私はどんなことでもできるのです」ピリピ 4:13 と、「どんな境遇にあても満ち足りる」秘訣を明かしています。それは、パウロが「私を強くしてくださる方」と呼んだイエス・キリストご自身のことです。パウロは、「自分ではできない。けれども、私と共におられるイエス・キリストが、それをさせてくださる。私を満たしてくださる」と言っているのです。

さて詩篇 23 篇は４節まで羊飼いである主に養われる満ち足りた様子と主に導かれる人生の幸いが歌われています。つまり主が羊飼いであり、主を信じ、主に従う者たちが羊にたとえられています。しかし、

最後の５，６の２節は、違う話が記されています。ここでは主は客人を迎える主人として描かれ、主を信じ、主に従う者たちが大切な招待客であると言われています。主は、私たち招待客をどんなふうにその家に迎えてくださるというのでしょうか。

最初に５節ですが、「あなたは私の前に食卓を整え」とあって、主が私たちを祝宴に招いておられることが言われています。この「食卓」は、祝宴を意味することばであり神の国や、神の国に迎え入れられる救いの喜びを表しています。「あなたは私の前に食卓を整え頭に香油を注いでくださいます。」というのは、大切なお客様を迎えるとき、その人の頭に香油を注いで歓迎したという当時の慣わしに基づいた言葉です。当時も今も香油は非常に高価なものです。それを客人に惜しみなく注いでくださるというのは、主がどんなにか私たちを歓迎してくださっているかを表しているのです。この香油は主の祝福を表します。主は、私たちに地上の祝福だけでなく、天の祝福を惜しみなく注いでくださるのです。続けて「私の杯は、あふれています」というのは、主が与えてくださる喜びがどんなに大きいかを表しています。この世が与える喜びはすこしは心の渇きを和らげてくれますが、すぐにまた渇いてしまいます。しかし、主が注いでくださる喜びは、私たちのたましいを満たしてあふれるほどのものなのです。それは、私たちのたましいに注ぎ続けられて途絶えることがありません。しかも、この喜びの祝宴は、「私の敵をよそにあなたは私の前に食卓を整え」とあるように、敵を前にしている状態で開かれるのです。つまり主が開いてくださる食卓は、勝利を先取りした食卓なのです。私たちの人生には、必ず困難や妨げがあります。がっかりすることや、「ムッ」となること、また「イライラ」することは、数限りなくあります。主は、このように、さまざまな困難や課題の中でも、私たちに救いの喜びを与えてくださるのです。それに打ち勝ったら食卓に招いてあげるとは言っておられません。「主はご自分の羽であなたをおおいあなたはその翼の下に身を避ける。主の真実は大盾また砦。」詩篇 91:4 今、困難の中にあっても主はあなたを守り、そこに平安と祝福を与えると言ってくださいます。

最後 6 節は、こう言っています。「まことに私のいのちの日の限りいつくしみと恵みが私を追って来るでしょう。」「いのちの日の限り」というのは、生涯を通してということです。主は、私たちの生涯の初めから終わりまで共にいてくださいます。では、地上の生涯が終わるとき、私たちはどうなるのでしょうか。6 節は「まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みが、私を追って来るでしょう」と言っています。この「追って来る」という言葉は、犬などがどんなに追い払ってもしつこく人のあとをつけ回すようなときに使う言葉です。普通は人が神の「いつくしみと恵み」を追い求めるものです。ところが、ここでは神の「いつくしみと恵み」のほうが人を追い求めると言われています。神の「いつくしみと恵み」を追い払うような人はいないでしょうが、もし、それを追い払おうとしても、それらは、私たちを追いかけ、私たちから離れないというのです。こんな恵みは、聖書以外、どこにも教えられていません。こんな恵みをくださるのはただ主おひとりです。

しかも、ここでの「恵み」はヘブル語で「ヘセド」という言葉が使われています。これは「契約の愛」とも呼ばれ、神が堅い約束、契約をもって私たちに誓ってくださった恵みや愛を指します。人間の愛のように時間が経てば冷めていき、場所が離れれば薄らいでゆき、その日そのときの気分で変わるようなものではありません。どんなことがあっても変わることのない永遠の愛を指しています。そして詩篇 23 篇は「私はいつまでも主の家に住まいます。」という言葉で終っています。「主の家」とは旧約では神殿を指す言葉ですが、ここでは天の神殿のことです。今、私たちは、地上で、礼拝という「天の窓」を通して、天を覗きみていますが、やがて、私たちは天に迎え入れられ、そのすべてを見ることになります。天の神殿で、御座におられる主を礼拝するのです。

また、「主の家」には、「神の民」、「神の家族」という意味もあります。私たちが世を去って行くところは、見知らぬところではありません。そこは私たちの信じる主イエスがおられるところ、主を信じる人々のいるところ、私たちの天の家族がいるところです。天の御国にはすでに召された教会の兄弟姉妹がいま

す。少しミーハー的ですが最近、葬儀のあったエリサベツ女王もエリサベツ姉妹としています。そこは私たちのふるさとです。私たちはみな、イエスを信じて天で生まれた者たちです。クリスチャンとはこの地上で主イエスを信じた時に同時に天において誕生しました。私たちはみな、天では同じ「主の家」という大邸宅の住人になるのです。同じ故郷を持ち、やがて共に住む者たちが今、ここで出会い、共に天への旅を励まし合う。それがキリスト者の交わりです。

主イエスはご自分のことを「わたしは良い牧者です。」ヨハネ 10:11 つまり良い羊飼いですとおっしゃいました。続けて「良い牧者は羊たちのためにいのちを捨てます。」とあるように十字架で私たちのためにいのちを捨てて下さいました。また「わたしは門です。」ヨハネ 10:9 と言われ、人は自分を通って主の家に入り、住人となると言われました。何が無くとも私たちは主イエスを救い主と信じ、従っているならそれで十分なのです。ですから乏しいことはない、つまり満ち足りた人生を生きるためにはイエス・キリストを信じることが最も大切なことなのです。まだ主イエス・キリストを救い主と信じていない方はぜひ今、主イエスの十字架と復活は私のためであったと信じることを切にお薦めいたします。すでに信じている方も私たちの人生はいつ何時、危険な目に遭い、困難に直面するかもしれません。そんな時にも「私の敵をよそに、祝宴を用意」してくださっている神のご愛とご真実を覚えて歩むことが出来るように主に自分の信仰を強めてくださるようにと祈ってゆきたいと思います。